

令和5年度第2回「生徒による授業評価」集計結果について

令和5年12月、本校生徒に対し「生徒による授業評価」を実施しましたので、結果を報告いたします。

1 授業評価の概要と結果

(1) 評価項目

大項目	設問	小項目
ついでに授業の在り方に	1	毎時間の授業や単元のはじめに学習のねらいを示したり、毎時間の授業や単元の学習のあとに学習したことを振り返ったりする機会がある。
	2	単元（内容のまとめ）の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある。
	3	単元（内容のまとめ）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある。
学習の状況について	4	授業の中で身についたことや、できるようになったことを実感することができた。
	5	他者の考えを知ることにより、新たな考え方を知るなど、自らの考えを広げ深めることができた。
	6	授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた。
	7	授業で学んだことをそれまでに学んだことと関連付けて理解することができた。

(2) 評価

(1) の項目について次の4段階で評価を行った。

4 かなり当てはまる	3 ほぼ当てはまる
2 あまり当てはまらない	1 ほとんど当てはまらない

(3) 集計と処理

教科ごとに集計を行い、小項目の評価が「4 かなり当てはまる」の割合を算出した。教科ごとに「4 かなり当てはまる」の割合が最も高い項目には塗りつぶし太字、最も低い項目には下線で明示した。

(4) 各教科の小項目の評価「4 かなり当てはまる」の割合

設問	1	2	3	4	5	6	7
国語	49.0%	44.2%	49.1%	50.6%	46.5%	50.4%	48.8%
地歴・公民	47.7%	47.2%	50.5%	51.7%	48.5%	50.6%	48.1%
数学	53.7%	47.7%	45.6%	44.4%	48.9%	47.7%	48.0%
理科	48.3%	46.4%	49.0%	47.9%	48.3%	51.0%	48.7%
保体	46.0%	45.7%	43.8%	42.0%	46.9%	48.8%	47.8%
芸術	44.1%	45.7%	47.8%	42.9%	48.5%	51.5%	49.0%
外国語	50.6%	48.5%	52.5%	49.4%	49.6%	52.0%	48.0%
家庭	44.8%	52.5%	52.1%	52.9%	53.7%	54.8%	56.4%
情報	55.3%	52.6%	54.9%	53.9%	56.7%	52.2%	55.6%

各教科の分析と改善の手立て

分析		改善の手立て
国語	<ul style="list-style-type: none"> 設問4の割合が50.6%と最も高くなっている。授業において、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」の実現ができていることの結果であると考える。 設問2が44.2%と最も低くなっている。これは、設問5の割合の低さ(46.5%)が影響していると考える。授業において、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」があまり実現できていないことの結果であると考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 単元ごと、授業時間毎において、学習のねらいの提示や授業の振り返りを確実に行うことによって、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」の機会を今後もさらに増やしていく。 学習活動の中での言語活動を通して、生徒が自らの考えを表現・共有する時間を確保し、他者との協働的な学びの中で、自らの考えの深化につながるような「対話的な学び」の機会をさらに充実させる。
地歴 公民	<ul style="list-style-type: none"> 全ての設問について、第1回のアンケート結果に比べ「4の割合」が増えており、「授業の在り方について」は前回の改善の手立てが奏功し、「学習の状況について」では、授業の進度に伴って生徒自身の理解度や思考、取り組みが進んだことが、結果につながったと考えられる。 特に、前回低かった設問1(31.7%)が47.7%と上昇した背景には、主体的な学習の方法としてペアワークを多用したこと、ICTを活用したことなどがあると思われる。 また、今回一番低かった設問4(30.1%)は今回51.7%となった。これは、既習事項をベースにして、関連付けで次の単元を学ぶことができたためと考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が「身についた」「理解できた」「他者の考えを知り、自己の思考を深める」といったことを実感できるような授業展開を心がける。 引き続き、ICTの活用や講義内容の精選によりペアワークやグループワークを取り入れる授業を展開し、主体的に深い学びを追求する。 その一方で、主体的に考えたり、受験に対応するためには基本的な知識の教授が必要となるので、前項とのバランスをうまくとりながら授業を展開することを追求する。
数学	<ul style="list-style-type: none"> 設問4では1学期よりも数値が低くなっている。2学期の単元が生徒にとって躊躇やすく苦手になりやすい分野であるからだと考えられる。 設問1の項目が高い数値が出ている。各教員が授業の冒頭でねらいを示したり、振り返りの機会を設けていることが結果に出ていると考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 解く時間が足りないなど、演習する時間が少ないという意見がアンケートからも見られたため、生徒の演習する時間を増やし解けるようになることで苦手意識を克服し、授業で学習したことが身についたという実感させる。
理科	<p>「設問6. 授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた。」において「かなり当てはまる」と回答した生徒の割合が他の項目と比較して高かった。一方で「設問2. 単元（内容のまとめ）の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある」において「かなり当てはまる」と回答した生徒の割合は他の項目と比較してやや低かった。設問6で肯定的な回答の割合が高いことから、生徒は授業で学んだ知識を活用できていると思われる。設問2を改善することで、他者の意見を取り入れ、学んだ知識を多面的・多角的な視点で考えられるようになれば、学習の質がより高まると考えられる。</p>	<p>「設問2」の改善に向けて、自分の考えを他者と共有する機会を多く設けられるよう心がける。その際、生徒が自ら考え他者と話し合うことで多様な視点を取り入れ、学習理解を深められるような良質な問い合わせ教員が設定できるよう工夫する。</p>
保健 体育	<p>・設問6【授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題解決方法を考えたりすることができた】が「かなり当てはまる」の高い割合になっている。しかし設問4【授業の中で身についたことや、できるようになったことを実感することができた】が「かなり当てはまる」の割合は低くなっている。</p> <p>のことから授業内で、【設問6】について生徒が自ら考えをまとめたり、課題解決方法について考えさせる課題や練習を、教員が設定できていると考えられる。【設問4】については、教科の特性から保健であれば、1時間ごとに単元が変わったり、体育であれば、種目が変わったりすることから、「かなり当てはまる」の割合が低くなっていると考えられる。</p>	<p>・分析した通り、【設問4】についての改善は教科の特性上難しい部分があるが、保健であれば、単元ごとに分断せずに前時の授業の復習から授業を行うなどして、関連付けていきたいと思う。体育であれば、種目は違えど、「型」が同じ場合は大切な要素が似ている部分があるので関連付けて、生徒ができるようになったことを実感することができるような場面を設定していきたい。</p>
芸術	<ul style="list-style-type: none"> 10月の評価と比較して、ほぼすべての項目が前回の数値を上回り、概ね良好な評価であると考えられる。特に、前回、最も数値の低かった設問6が15.7%上昇し、最も数値が伸びている。これは、芸術の中で授業改善に関する共通の理解が図られ、改善策が功を奏したと考えられる。 その一方で、設問4が42.9%と最も低くなっている。毎時間の授業で、ねらいの提示や授業の振り返りの時間が不足しており、「何ができるようになったか」を確認しやすい環境にあったと考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 今回、最も低い設問4の「何ができるようになったか」を実感させるには、毎時間の授業において、ねらいの提示や授業の振り返りを確実に行うことによって、その時間に身についたことや、できるようになったことを実感させられるようにする。 また、今後も教科の特徴を生かし、今、取り組んでいることが自分と関わり（意味）があると感じ取らせ、何を追求し、どのような発展性をもたらすのか考えさせていきたい。芸術教育の柱である「感性」や「想像力」はすべてに繋がることを大切に、今後もより良い授業展開となるよう努めていきたい。
外国語	<p>各質問項目ともに、「かなり当てはまる」と回答した生徒の割合が大幅に上昇した。第1回目の授業評価アンケートをふまえた授業改善が少しずつではあるが進んでいるのではないか。一方、「他者の考えを知り、自らの考えを深める機会について」や、「授業の中で身についたことや、できるようになったことを実感する」については、他の項目より上昇割合が低かった。</p>	<p>授業の在り方については、授業の連続性や単元の個別性を鑑みながら、他者の考えを知り、自分の考えをさらに深めるような時間を設けたりして、生徒が目標の達成に向けて自己調整できるように心がける。また、身についたことやできるようになったことを実感できるような教材・教具の開発に取り組み、実施したい。</p>
家庭	<ul style="list-style-type: none"> 全ての項目において肯定的な評価の割合が高く、特に設問7「授業で学んだことをそれまでに学んだことと関連付けて理解することができた」に関しては、約6割の生徒から「かなり当てはまる」の評価を得られた。本校教科目標である「生活のなかから課題を見出し解決する能力を身に付ける」という点においてグループワークや実習を通しての成果が得られたものとみられる 設問1は他の設問と比較して「かなり当てはまる」の割合が低くなっているが「ほぼ当てはまる」を含めると9割の肯定的評価が得られている 	<ul style="list-style-type: none"> 学習のねらいの明確な提示と学習内容の振り返りを今後も継続して行う。 全ての項目において実習を行っている期間の評価は高い傾向にある。高齢者・金融・消費生活などの単元においても、より身近に感じられるような授業内容を研究し展開していきたい
情報	<ul style="list-style-type: none"> 第1回の授業評価からすべての項目が20%以上「かなり当てはまる」が上昇していた。特に他者の考えを知る質問2、5は30%強上昇していた。これは、グループワークや実習を中心とした授業内容に変更して主体的な活動が増えたことが原因だと考えられる。 自由記述では、第1回と同様に実習・課題に対しての時間が足りないという意見が多かった。PCスキルを上げる時間の確保が今後の課題としてあげられる。 	<ul style="list-style-type: none"> グループワークの学習内容を実践し、他者の意見を聞き協働作業をすることで他者を意識させる授業展開を継続していく。 情報モラルや情報社会の分野を実習で考えさせる内容に変えていきたい。 来年度は、単元の順番を再構築する必要がある。 課題を取り組む時間を増やしていく。また、PCスキルを上げる実習を増やしていく。

2 科目別・項目別評価「4 かなり当てはまる」の割合 (各学年必修科目のみ記載)



